

小杉忠三郎旧蔵鷲流狂言伝書目録・解題：中村保雄氏蔵、仁右衛門系伝書・佐渡資料

著者	田口 和夫
雑誌名	能楽研究：能楽研究所紀要
巻	14
ページ	173-198
発行年	1989-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020404

小杉忠三郎旧蔵鷺流狂言伝書目録・解題

—中村保雄氏蔵、仁右衛門系伝書・佐渡資料—

田 口 和 夫

はじめに

この狂言伝書は、幕末明治に佐渡で狂言を演じていた小杉忠三郎旧蔵のもので、その孫忠太郎氏から中村保雄氏が一括購入されたものである。鷺仁右衛門系の狂言伝書群として、狂言・間狂言のまとまった本を中心に、免状や能・狂言関係書を含み、近世後期のものとしては、鷺賢通本とならぶ価値を持つものと考えられる。稿者は鷺流狂言史の研究を一つのテーマとしているので、仁右衛門系では、川瀬一馬博士蔵(現・架蔵)延宝忠政本を翻刻紹介し、伝右衛門系では、天理図書館蔵享保保教本の解題を草することができた。そのほか、仁右衛門系の安永森本(能楽研究所蔵)・寛政有江本(観世宗家蔵)・賢通本(田中允氏蔵)、伝右衛門系の宝暦名女川本(檜書店蔵)・野中本(実践女子大学図書館蔵)などの代表的な諸本を調査・検討することができた。この小杉本の存在も、野村万之丞氏からもれ承ることがあったが、現蔵者中村保雄氏の御好意によって調査ならびに主

要台本の撮影をさせていただいたのは、一九七九年夏のことである。その後、一九八〇年三月刊の『静岡英和女学院短期大学紀要』第十二号に、「小杉本『追善狂言番組』・『開化白拍子』翻刻・解題——明治初年の鷺流狂言」と題して小稿を草し、その解題の中で「別に報告する」と予告したまま、稿者の怠慢によって報告をひきのぼしていた。最近、賢通本を補強するものとして、賢茂小杉本などが用いられることもあり、かたがたこの伝書についての関心も高まっているようなので、その時の調査による旧稿を整理して、ここに大要を報告しておきたい。

この伝書群は、次に示すように、大小七個の箱に入っている。箱は所蔵者の小杉忠三郎によって調整されたものようだが、大箱の仮称「賢茂小杉本」のように、まとまった揃本がきちんと入っているものもあるが、大体の分類によって、さまざまの本を収めたものが多い。箱の順序も異なるが、仮に番号を付しておく。

一、大型杉箱、箱蓋表書「手附本鷺流狂言書」。箱蓋裏書「鷺

仁右衛門賢茂伝授之 小杉忠三郎。仮称「賢茂小杉本」等を収める。四十一冊。

二、小型杉箱、箱蓋表書「鷺流 狂言秘書」。箱蓋裏書なし。仮称「文化小杉本」等を収める。六冊。

三、小型杉箱、箱蓋表書「袖珍 鷺流 狂言書」。箱蓋裏書なし。「文化小杉本、名寄」など。二十九冊と断簡。

四、中型杉箱、箱蓋表書「鷺流 狂言奥祕」。箱蓋裏書「鷺仁右衛門伝授之 小杉忠三郎」。へこんくわい×座禅等の習物、大小不同の本を収める。三十八冊と二葉。

五、小型杉箱、箱蓋表書「鷺流狂言書」。箱蓋裏書なし。茶色鷺流狂言本・仮綴鷺流狂言本を収める。七十三冊。

六、小型杉箱、箱蓋表書「鷺流間秘書」。箱蓋裏書「鷺仁右衛門賢茂伝授之 小杉忠三郎」。「文化小杉本」の間、各種免状等を収める。十九冊と六葉と二点。

七、極小型杉箱、箱蓋表書「鷺流袖珍秘書」。箱蓋表書「鷺仁右衛門伝授之 小杉忠三郎」。森田流笛唱歌・名寄等を収める。十七冊と五葉。

主要な伝書は、第一箱の「賢茂小杉本」と第二箱以降に分散して収められる「文化小杉本」だが、それらを含め、注記・年紀等に富むこの伝書群は、幕末から明治にかけての鷺流狂言を考えるために有益なものである。所収冊数は総計、二百二十二冊。その他に免状五点、断簡等がある。

鷺流としての稀曲を収めた『別習鷺流狂言本』は、次号にその翻刻・解説を載せる予定である。

〈凡例〉

▼本稿は、中村保雄氏御所蔵の、小杉忠三郎旧蔵鷺流狂言伝書の目録とその解題である。

▼伝書を収めた杉箱に（一〇七）の番号を付し、各箱内の文書ごとに通し番号（算用数字）を付した。書名を見出しとして記したが、「」で囲んだものは該本の題記（題簽・外題・内題のいずれか）に従った書名であり、「」で囲まぬものは稿者が適宜命名したものである。書名が内容から判断できる場合であっても、題記が存在しない文書の書名は、「」で囲まない。

▼書誌のとり方、解題の分量は文書により一定ではないが、奥書の類、また内容的に文書の性質を明らかにする記事などは、つとめてこれを引用した。

▼旧蔵者小杉忠三郎について、ならびに主要な伝書である、賢茂小杉本・文化小杉本に関する解題は、後に一括して記述した。

▼書誌のうち、寸法は耗単位である。調査の時の手落ちで計測していないものがある。記述の繁簡よろしきを得ないものが多いが、調査時の関心が揃い本に集中していたためである。

▼（ ）は稿者の作業による。

〔目録〕

一 大型杉箱 四十一冊

1 賢茂小杉本 三十九冊

230×166。柿色厚紙表紙、袋綴、綴糸紫。楮紙。表紙中央、上部に白色題簽(76×98)を貼付し、狂言の曲名を列記し、左下部に一から三十九までの番号を記す。第一冊から第十冊までの本の下小口に一と記し、第十一冊から第二十冊までに二、第二十一冊から第三十冊までに三、第三十一冊から第三十九冊までに四と記す。一冊の所収曲数は四曲〜七曲。総曲数は題簽曲数では二百二曲となるが、後記の〈鞍猿〉の本文がなく、二百一曲となる。なお、第一冊裏表紙内側に「三十九冊組」と朱書する。また、第二冊〈氏結〉、第十二冊〈樂阿弥〉、第二十二冊〈茶嗅座頭〉、第二十五冊〈連歌盗人〉、第三十八冊〈蟬〉に型付や異文を書いた別紙がはさみこんである。第三十九冊〈鞍猿〉には本文の記入がなく、該当部分に白紙十三丁が綴じ込んでいる。

〔曲目〕一、麻生・末広かり・目近込骨・三本柱・張蛸。
二、恵比須毘沙門・連哥毘沙門・恵比須大黒・大黒連歌・福の神・古キ方 氏結、三、煎物・鍋八撥・牛馬・鎧・宝槌・隠笠。四、餅酒・鴈雁金・三人夫・搗栗・昆布柿。五、筑紫奥・佐渡狐・相合烏帽子・松樫。六、八幡前・鶏聲・音曲聲・

船渡聲・賽目聲・斯好聲。七、二人袴・懷中聲・引敷聲・庖丁聲・水掛聲・岡太夫。八、^{十六番習}入間川・^{十六番習}粟田口・^{十六番習}秀句傘・^{十六番習}鞍猿・^{小習}唐相撲。九、今参・鼻取相撲・文相撲・蚊相撲・萩大名・二人大名。十、墨塗・鴈盗人・人馬・早漆・禁野・雁礫。十一、遊善・蛸・栄螺・老武者・塗師・若市。十二、通円・樂阿弥・宗論・^{十六番}泣尼・^{小習}水汲新発意・川上座頭。十三、地藏舞・名取川・布施無経・金津地藏・悪坊・悪太郎。十四、花折新発意・小傘・大般若・不腹立・薩摩守・骨皮。十五、半銭・^{十六番習}朝比奈・^{小習}餌差十王・^{十六番習}八尾・^{十六番習}節分・^{十六番習}闖罪人。十六、首引・清水・脱壳(殻)・神鳴。十七、鬼の槌・鬼の継子・政頼・宝の瘤取。十八、^{十六番}比丘定・^{十六番}枕物狂・^{小習}法師母・^{小習}金岡・^{小習}鳴子。十九、因幡堂・千切木・髭櫓・伊文字。二十、吃・鎌腹・内沙汰・鈍太郎・寝代。二十一、柿山伏・祢宜山伏・犬山伏・梟山伏・蟹山伏・苞山伏・腰祈。二十二、伯養・井碯・不聞座頭・花見座頭・茶嗅座頭。二十三、伊呂波・鞆・富士松・鬼瓦・附子。二十四、舍弟・千鳥・鐘の音・鏡男・二王。二十五、爪^魚盗人・連歌盗人・盆山盗人・子盗人・花盗人。二十六、狐塚・文山達・磁石・茶壺・長光。二十七、飛越・仏師・八句連哥・呂連・三人片輪。二十八、土筆・縄索・棒縛・伯母ケ酒・胸突。二十九、止動方角・栗焼・柑子・青襖(素袍)落・米市。三十、口真似・咲花・船ふな・花争・痺。三十一、酔辛^生羹共・太刀奪・心奪・昆布壳・膏藥煉。三十二、鞍馬参・鱸包丁・井杭・武悪・惣八。三

十三、文蔵・二千石・物真似・寝音曲・呼声。三十四、鶏流・御冷・児鎗流馬・業平餅・唐人子宝草刈唐人トモ。三十五、文荷・箕被・空腕・人か杭敷・西翁。三十六、釣針・石神・河原太郎・鹿ぞ鳴。三十七、歌仙・若菜・合柿・横座・引括。三十八、笋・菊水祖父・蟬・姫糊・魚説法。三十九、替布施無経・替呂蓮・古流鴈磔・古流吃・（替唄鞆猿、目録にあるが本文なし）。

2 賢茂小杉本・両番習 一冊

230×166 薄茶下部金箔散らし厚紙表紙。用紙、題簽とも1と同装。裏表紙内側に双廓の「青野村」という小朱印が押してある。重い習物として別冊とされたものであろう。

〔曲目〕座禅・こんくはい

3 「別習鷺流狂言本」 一冊

240×172。薄浅葱色厚紙表紙。袋綴。綴糸白。表紙左に177×47の白色縦長題簽を貼付し、標題を本文と別筆で記す。最終丁に「明治十九年一月 青野村 小杉守治（花押）」と記す。これも本文と別筆で、あるいは題簽と同筆か。箱に入れたとき、この本だけが大きく、余裕のない寸法になっている。本来、別種で、稀曲の集成として別置されていたものである。

〔曲目〕雪打合・蛛盗人・指鷺・松囃子万歳太郎とも・花戦・昆布布施・連雀・菌山伏・酒盃拝・伊勢物語・二九十八・鈍言草・姫糊・齊斎布施・狸壳

二 小型杉箱 六冊

1 文化小杉本「鷺流狂言甲」 一冊

158×236。藍色牡丹花紋布覆表紙。綴糸白。二重綴。楮紙。左上に長方形小型白色題簽を貼付し、「鷺流狂言 甲」と記す。これは、次の2・3、三1・六1・2・3・4と一具の伝書とみられ、三1に「文化元歳調」とあることから、仮に「文化小杉本」と称する。内題なし。目録として「末広狩七十四」から「居杭七十四」（数字朱書）まで記す。

〔曲目〕末広狩・麻生・萩大名・今参・八幡前・隠笠・煎物・張蛸・二人大名・三本柱・二千石・文蔵・鱸庖丁・墨塗・止動方角・武悪・業平餅・歌仙・素袍落・寝音曲・鐘乃音・文相撲・蚊相撲・鼻取相撲・二人袴・引敷聲・賽目聲・鶏聲・懷中聲・音曲聲・庖丁聲・水掛聲・舟渡聲・斯好聲・鴈金・相合烏帽子・餅酒・三人夫・松樗・勝栗・昆布柿・筑紫奥・岡太夫・佐渡狐・早漆・米市・蟹山伏・柿山伏・苞山伏・称宜山伏・犬山伏・腰折・梟山伏・大般若・氏結・布施無経・宗論・小傘・呂蓮・花折新発意・腹不立・飛越・薩摩守・金津地藏・地藏舞・名取川・仏師・悪坊・骨皮・宝の癪取・菊水祖父・西翁・唐人子宝・居杭

2 文化小杉本「鷺流狂言乙」 一冊

1と同装。目録として、「千鳥七」から「大黒連歌九十二」（数字朱書）まで記す。

〔曲目〕千鳥・鞍馬参・呼声・鴈磔・いろは・鶏流・茶壺・長光・爪爪盗人・花盗人・子盗人・鴈盗人・八句連哥・連歌盗人・盆山盗人・富士松・老武者・髭櫓・契木・児鎗流馬・酢辛・合柿・目近米骨・牛馬・三人片輪・磁石・鬼瓦・物

真似・舎弟・膏藥煉・船ふな・土筆・文荷・附子・空腕・口真似・咲花・花争・栗焼・棒しぼり・狐塚・痺り・輝・縄なひ・鍋八撥・宝の槌・鎧・文山立・人か杭敷・太刀奪・昆布壳・柑子・木六駄・河原太郎・伯母か酒・脱壳(鬚)・神鳴・清水・首引・鬼の継子・鬼の槌・蛸・栄螺・不聞座頭・伯養・井碓・花見座頭・茶艱座頭・寝代・若菜・箕被・鈍太郎・吃り・鏡男・若市・因幡堂・石神・釣針・伊文字・内沙汰・鎌腹・心奪・悪太郎・塗師・惣八・仁王・福の神・恵比須大黒・連歌毘沙門・恵比須毘沙門・大黒連歌

3 文化小杉本、驚流狂言習 一冊

1・2と同装。左上題簽剝落し、そのあとへ別の白紙を帖る。あるいは「驚流狂言丙」か。目録という文字はなく、「川上座頭巻」以下「栗田口十六」まで「習拾六番」、「樂阿弥十七」から「半銭十九」まで「小習」。「泣尼二十」から「比丘定二十三」までを「重キ習」、「鱸包丁二十四」から「別習鉢扣二十六」までを「平外」と分類している。最後の「鱸庖丁」と「空腕」は目録とは順序が異なっている。また「鉢扣」は本文がなく、最後に白紙が十二丁綴じ込まれているのは、本来あったものを書写のとき削除したのか、あるいは記入を期待して白紙を置いたのか不明である。全曲に注記があるが、曲の後に主要部分の型付などを付載するものもある。

〔曲目〕川上座頭・入間川〔初ノ詞云替〕等ヲ付ス・靱猿〔猿の所作付〕ヲ付ス・秀句傘・遊善〔形付〕等ヲ付ス・宗論・水汲新発意・朝比奈・餌指十王・八尾・節分・法師ケ

母・唐相撲〔替ノ形〕ヲ付ス・鳴子・闇罪人・栗田口・樂阿弥・通円・半銭・泣尼・枕物狂・金岡・比丘定・替ノ形空腕・平鱸庖丁

4 「間装束附」一冊

234×172。灰色金粉撒き表紙。綴糸黄。左上に双边題簽を貼付し、「間装束附」と記す。内題なし。「脇能之部、高砂」から始まり、「輪藏鉢扣」まで記す。

5 能與次第・二百拾番謡目録 一冊

248×182。亀甲菊鶴亀模様入り。藍色厚紙表紙。綴糸白。外題なし。はじめ一丁に「能與次第之弁」を記し、二丁から明和二乙酉年四月五日、觀世左近秦元章刊の『二百拾番謡目録』を敷き写しする。裏表紙見返に「賢茂」と記す。

6 九祝舞 一冊

5と同装。元章による明和改正謡本のうち『九祝舞』を写したものの。「初日、二日、三日、四日、法会舞、十二月の往来、父尉延命冠者」以上〔翁〕の式七種と、「弓箭立合、船立合」の詞章を記す。裏表紙見返に「賢茂」とある。

三 小型杉箱 二十九冊(別に断簡・白紙)

1 文化小杉本、名寄・装束付 一冊

89×203。藍色牡丹花紋布覆表紙。綴糸白。二重綴。楮紙。左上に題簽剝落の痕あり。白紙二丁の後、狂言の名寄(雛子付あり)〔都合百八十五番〕を記し、次いで〔祐善〕以下九番で「右小習ニ仕候」、次いで〔栗田口〕以下十四番で「右重キ習ニ仕候」、次いで〔座禪花子共〕〔こんくわい〕の二番で「右大習ニ仕候」。

候」と注す。続いて「小舞名寄」「語名寄」があり、次に「三番三」×同錫杖式×千歳、続けて「松龜風流」以下「三角風流」まで十九番の風流を「右大習三仕候」とし、次に「替間」として「加茂間御田」から「芭蕉間脇掛之時 応答」まで十一番を「右小習三仕候」、〈道成寺間〉から「鷺間口明」まで八番を「右重キ習三仕候」と記している。以上が名寄部分で、次に丁をあらためて、狂言の各曲についての人数・装束・道具付を記し、その後、道具図解、間狂言装束付、風流装束付があり、最後に聖徳太子以下の「神作」から「弟子打」までの面打の名(この部分は寛政九年序の喜多古能著『仮面譜』に基づく)を列挙する。白紙一丁を置き、その終丁裏に本文と別筆で「文化元年ニ調ル」と記し、裏表紙見返に「小杉忠三郎守清(花押)」、「文化元歳調」と記す。また小紙片がはさみ込んであり、「日光ハ文治ノ人ナリ、文治ヨ(マ)明治三十一年迄七百弍十四年、文明ヨリ明治三十一年迄年数四百三十年、弘安リ(マ)明治三十一年六百二十四年、本ハ文化元迄」と記す。さきの文化元年の年紀とこの紙片は同筆で、小杉忠三郎の筆とみられる。守清の花押は、一3の小杉守治の花押と類似し、また数多い加藤銀蔵の花押と同種なので、この花押を花押Aとしておく。このはさみ込み紙片は、面作者の下に記された年数についての考証である。実は『仮面譜』の注記の転載で、寛政九年(一七九七)段階のものだが、小杉忠三郎は、これを六年後の文化元年と計算し、「文化元年ニ調」と記したのであろう。他に内証としての年紀を持っている同装の本には、六3「鷺

流替ノ間」(後述)に上演記録が付され、宝暦十三年(一七六三)から天保九年(一八三八)までの年紀が見える。寛政から文化・文政ごろというのは、大体本書の内容として適当な年紀とみられるので、文化元年というにとりわけて根拠はなさそうだが、藍色牡丹花紋布覆表紙の一連の本を、文化小杉本と呼んでおくことにする。

2 「膏藥煉」一冊

175×125。仮綴、共紙表紙。袋綴。一番本。稽古本。双廓の朱印「青野村」あり。裏見返に「明治四歳未十月」と「青野村」朱印、「小杉守治(花押)」あり。この花押は以下同装の守治署名の花押と共通で一3とは別種、これを花押Bとする。

3 「茶壺」一冊

2と同装。「明治四歳未十月 小杉守治(花押B)」。

4 「因幡堂」一冊

2よりやや小。「小杉守治(花押、これはAの変型か)」。

5 「墨塗」一冊

2と同装。「小杉守治」。

6 「習蚊相撲」一冊

2と同装。「小杉守治」。

7 「サキリウ他見無用内沙汰」一冊

2と同装。「明治九子五月 小杉姓(黒印)」。

8 「習節分」一冊

2と同装。小杉守治(花押B)。

9 「舟渡聲」一冊

- 2と同装。「小杉守治」。
- 10「花争」一冊
2と同寸。表紙なし。仮綴一か所。
- 11「他見無用朝比奈別大習」一冊
2と同装。型付詳細にあり。
- 12「富士松」一冊
2と同装。「小杉守治」。
- 13「舎弟」一冊
2と同装。双廓「青野村」印。「小杉守治(花押B)」。
- 14「鶏聲」一冊
2と同装。「明治四歳末十月 小杉守治(花押B)」。
- 15「他見無用韃靼」一冊
2と同装。「小杉守治(花押B)」。
- 16「吃り」一冊
2と同装。「小杉守治(花押B)」。朱型付あり。
- 17「泣聲」一冊
2と同装。「小杉忠三郎守治(花押、これはAの変型か)」。
- 18 謡物 一冊
175×125。表紙なし。仮綴一か所。楮紙。型付あり。狂言の謡部分を抜き出したもの。
〔曲目〕塗師・井礪・張蛸・餅酒・鴈雁金・昆布柿・相合烏帽子・松樗・勝栗・三人夫・連歌盗人・唐人子宝・石神・若市(因幡堂ヲ消ス)・髭櫓・宝乃槌
- 19 謡物清書本 一冊
- 180×129。表紙なし。仮綴一か所。斐紙。詳細な型付がある。〈餅酒〉など、前18と書入れも同文同字。18の清書本か。
〔曲目〕塗師・井礪・張蛸・餅酒・鴈雁金・昆布柿・相合烏帽子・松樗・勝栗・三人夫・連歌盗人・唐人子宝・石神・若市・髭櫓・宝乃槌・花見座頭・箕被・若菜・合柿・業平餅・煎物・茶艸座頭・恵比須毘沙門・老武者・鬼乃槌・棒しぼり・爪(盗人)・素袍落・悪太郎・早漆・昆布売・文荷・名取川・鐘の音・契木・三本柱・氏結・連歌毘沙門・大黒連歌・恵比須大黒・金津地藏・八句連歌・木六駄・西翁・菊水祖父・伊文字・歌仙・花盗人・神鳴・福乃神
- 20「習大藤内」一冊
114×158。仮綴。共紙表紙。袋綴。「驚流、明治十年丁丑二月、小杉忠三郎守治(花押A)」。黒印も押す。
- 21「加茂間御田」一冊
128×189。仮綴。共紙表紙。袋綴。楮紙。「岡村」と記す。これは驚仁右衛門派の狂言役者、岡村善五郎であろう。忠三郎との関係は後に記す。
- 22「春日龍神町積」一冊
233×194。仮綴。共紙表紙。袋綴。楮紙。「天保十四年癸卯十月書之 驚賢茂」とあり、「青野村」の双廓朱印あり。
- 23「替間重習、御田猿聲」一冊
140×214。仮綴。共紙表紙。袋綴。楮紙。表紙に「安政六年未正月吉日」とある。左下に「加藤性」と記したものを墨滅して「小杉」と書く。裏表紙見返に「銀蔵清久(花押A)」と記す。

すが、これに訂正はない。

24 「狂言笛」一冊

114×170。藍色菊模様厚紙表紙。左上に、打つけに「狂言笛」と書く。裏表紙見返に、双廓「青野村」印あり。墨付七丁。内容は狂言笛の唱歌。

25 笛唱歌 一冊

123×174。表紙なし。仮綴。紙数四丁。裏に、「先生道成寺相勤メ申候。此本鴻上本間先生開ニ付、藤津惣治右衛門三ヶメ脇能唐船相勤メ候ニ付、此ハンシキ楽勤メ候□、此本フ鴻上より送り候フニ御座候、明治十丁丑以三月八日初メ、三日相勤メ申候」と記す。「本間先生」は鴻上(両津市)の能大夫本間令蔵であろう。「藤津惣治右衛門」と明治十年三月八日からの演能については未詳。

26 笛唱歌 一冊

122×172。表紙なし。仮綴。前25と同じもの。

27 「当流深秘随一小謡絵抄」一冊

220×124。版本。朱厚紙表紙。左上に双廓題簽、「当流深秘随一小謡絵抄」内題、「改正精選頭書絵抄」随一小謡絵抄 大阪書林 宋栄堂梓」とある。裏表紙見返に「文化二乙丑歳五月開板 天保十巳亥歳七月再刻 皇京 勝村治右衛門(他五軒)」の刊記あり、「惣右衛門持」と記す。裏表紙に「加藤氏 青野村 加藤惣右衛門」という所持者名がある。これは加藤惣一郎・小杉忠三郎の父か。

28 「開化白びやうし」一冊

125×174。共紙表紙。仮綴。楮紙。表紙共十二丁。表紙に打つけで「開化白びやうし」と記す。内題も「開化白びやうし」。

内証から明治八年成立と見られ、吾妻能狂言の台本であろう。佐渡では、明治十三年七月、佐和田町の中原神社で三日間の大勧進能楽が行なわれた時の第三日に「狂言・白拍子」が見える(若井三郎氏『佐渡の能舞台』一〇二頁)ので、普通の狂言として演じられたことがあるらしい。出演者の一人は小杉忠三郎であろう。なお、この翻刻には、『日本庶民文化史料集成 狂言』に明治四十年、三河湖翁(静観)写のものが収められ、『静岡英和女学院短大紀要』第十二号(一九八〇年三月)にも小稿による翻刻と考証がある。

29 間語抜書 一冊

127×125表紙なし。仮綴一か所。斐紙。

〔曲目〕巴・善知鳥

30 狂言・間狂言断簡 三十五枚

未装丁のままばらになったもの、あるいは断簡、書きかけなど。判明する曲目を以下に記す。通円・鉢扣・瓢の神・あつもり・白楽天・高砂・難波・加茂・呉服・邯鄲・海人

31 未使用斐紙 多数。

四 中型杉箱 三十八冊・断簡二葉。

1 「こんくわい白色手附」一冊

233×165。茶色銀粉撒き厚紙表紙。綴糸灰。浅葱色題簽に「こんくわい白色手附」と記す。内題「こんくわい文字秘密也」。墨付四丁で、四丁表に「弘化三丙午十二月廿五日於 上御屋

敷初而勤之 鷺健次郎賢通四拾八歳 アト鷺慎之助賢茂十七歳

後見矢田清右衛門 同下野岩太郎」と上演記録を記し、四丁裏に作物の図を載せる。弘化三年（一八四六）八月五日に慎之助は公儀に召出され、鷺周三郎の名で観世座付となっている（『猿楽者分限短冊』）ので、この名乗りは不審だが、鴻山文庫蔵『江府御能組』の嘉永五年（一八五二）上演記録にも慎之助の名で記されている。この年令は信頼できる。後見の矢田清右衛門は『文化七年猿楽分限帳（重修猿楽伝記）』の宝生座の項に「狂言 父清助矢田清右衛門年三十四」として見え、弘化三年次は七十歳ということになる。下野岩太郎は明治初期に活躍した下野岩苔に相違ない。

2 「空腕」 一冊

234×164。浅葱色厚紙表紙。綴糸白。内題「空腕」。「替形習空腕 全」という剝落題簽あり、本書のものであろう。裏表紙見返に、双廓「青野村」の印、「小杉忠三郎」と記す。

3 「宝生流乱曲」 一冊

230×166。茶色厚紙表紙。綴糸白。单廓白題簽、「宝生流乱曲」。内題「宝生流乱曲ノ謡 拾七番」。裏表紙見返に「青野村 主小杉忠三郎」と記し、双廓「青野村」印あり。

4 「鷺流陰陽三番三セリフ」 一冊

160×240。藍色厚紙表紙。綴糸紺。白題簽、「鷺流陰陽三番三セリフ」。内題「錫杖ニテ舞フ陰陽三番三セリフ」。錫杖の徳を述べらる。裏表紙見返に「小杉忠三郎」と記す。

5 「座禅」 一冊

233×165。藍色金粉撒き厚紙表紙。双廓題簽、「座禅」。内題「座禅 花子共」。裏表紙見返に双廓「青野村」印。花子の出自を示す替の詞「松浦源五左衛門尉」息女という。六七と共通。

6 「こんくわい」 一冊

5と同装。題簽「こんくわい」。内題「今悔文字秘密也」。裏表紙見返に双廓「青野村」印。詳細な型付あり。

7 「今悔」 一冊

230×168。浅葱色厚紙表紙。綴糸白。題簽白、「鷺流狂言大習今悔文字秘密也」。内題同じ。終丁表に「東京深川留岡門前四十老番地鷺流狂言岡村獅子尾順則（花押）」、終丁裏に「明治十丑九月」と記す。裏表紙見返に「右正本形共小杉忠三郎殿東京出府ニ付家脇岡村善五郎獅子尾順則殿ヨリ相伝仕候ニ付林喜平享之取候也」と記す。小杉忠三郎が明治十年に東京へ出府したこと、この相伝が佐渡に拡がっていることが確かめられる。林喜平は三河静観と同時代に活躍、若井三郎氏『佐渡の能舞台』では、「明治二十七年九月二日六十才で没。西五十里村玉屋旅館の人、現在は佐和田町玉屋旅館である。逆水五郎兵衛に師事。（下略）」とある。

8 「こむくわる形付」 一冊

235×166。仮綴。共紙表紙。楮紙。打ついで、「明治十年丑十月十八日改メ 大習形附」。内題「こむくわる形附」。7を書きかえたもの。

9 「脇方船中之語」 一冊

175×116。浅葱色厚紙表紙。打ついで「脇方ノ入用船中ノ語」

と記す。内題「宝生流別習大秘書 協方船中之語」。裏表紙見返に「小杉忠三郎」。

10 「鶯 鶯蛙 月見座頭 鉢扣」一冊

230×165。空色網目入り厚紙表紙。中央部の白色題簽に「鶯 鶯蛙 月見座頭 鉢扣」と記す。

11 「秘書 三番叟拍子」一冊

245×173。仮綴、共紙表紙。楮紙。打ついで「秘書 三番叟拍子小杉」と記す。裏表紙見返に「森田流笛東京家元森田初太郎小杉」と記す。

12 「舞一円手配秘書」一冊

252×617。白色厚紙表紙。打ついで「元治二年調立方笛 舞一円手配秘書 丑 小杉姓とある。この「小杉」は、もと「加藤」とあったのを抹消してその上に書く。裏表紙見返に「佐渡郡野田村大字青野 小杉忠三郎藏」と記し、裏表紙に「青野邑」と記す。加藤姓から小杉姓への変更については、後に、小杉忠三郎についての考察の中で記す。

13 間の本 一冊

148×240仮綴。共紙表紙。楮紙。題簽剝落の痕あり。

14 間の本 上 一冊

255×159。仮綴。楮紙表紙。用紙斐紙。表紙上部に曲目を三段に書き、左下に「上」と記す。裏表紙見返に「于時嘉永三歳六月廿一日書竟 会津之住 寺島伝五郎」と記す。本文同筆。「曲目(表紙曲目により記す)」高砂・賀茂・嵐山・東北・六浦・兼平・烏帽子折・船弁慶・黒塚・野守・山姥・富士太鼓

・田邨・忠度・春日龍神・邯鄲・葵上・氷室・九世戸・玉葛・安宅・藤戸・経政(「ナシ」ト書ク)・雷電・雨月

15 間の本 下 一冊

14と同装。表紙左下に「下」と記す。裏表紙見返の識語も14と同文。

〔曲目〕道盛・車僧・大蛇・松虫・玉の井・桧垣・難波・小鍛冶・定家・和布疋・土蜘蛛・浮舟・朝長・張良・知章・大社・巴・是界・羅生門・熊坂・龍田・頼政・烏帽子折・宿借

16 安政加藤本狂言 一冊

170×243。もと銀泥模様入り厚紙表紙、綴じ代に残る。裏表紙同断。現見返に「加藤銀藏清久(花押A)」と「安政三辰十二月廿日 加藤銀藏書之」とを記す。

〔曲目〕萩大名・二千石・鷹盗人・鍋八撥・花争・空腕・鐘の音・爪(爪)盗人・棒しはり・素袍落・磁石・太刀奪・大般若・悪太良・早漆・昆布売・二人大名・鬼瓦・文山立・柑子・人か杭か・佐渡狐・縄なひ・太こ・文荷・千鳥・名取川・飛越・寝音曲・惣八・鎌腹・腹不立・聞す座頭・伯養・薩摩の守・呼声・狐塚・地藏舞・子盗人・脱壳(殻)・盆山盗人・栄螺・悪坊・口真似

17 「脇狂言鍋八撥」一冊

169×145。袋綴。共紙表紙。楮紙。打つけに「他見無用 脇狂言鍋八撥 人ヲ撰ミ三人事」と記す。右下に朱書「三川周蔵」とし角朱印二個を押す。終丁裏に「安政四丁巳年八月廿三日 三河新左衛門写之」とし、角朱印二個を押す。裏表紙見返に、

朱で「相川三川清左衛門ヨリ買請申候 明治元辰年十二月
鷺伝右衛門流本間本狂言装束トモ 金五円ニて真藤治良衛門
買請申候」と記す。

18 「宗論・闇罪人」一冊

165×144。薄茶色厚紙表紙。左上に打つて「宗論闇罪人 極
他見無用」と記した上に青碁盤縞模様の題簽を貼付し、「宗
論・闇罪人・靱猿・唐相撲・朝比奈 極他見無用」と記す。
何か(原所持識語か)を墨滅し、朱で「明治元辰年十二月 相
川三川清左衛門より買請申候」として、墨で「佐州佐渡国雑
太郡沢根村ノ住人 真藤治良 泰久(花押)」と記す。もと打
つけ書通りの二番であつたらしく、〈靱猿〉からは別筆。

19 「相合烏帽子」一冊

250×172。仮綴。共紙表紙、楮紙。打つて「嘉永三庚戌年七月
下九日」とし、「脇狂言 他見無用 相合烏帽子」と記す。表
紙見返に「奥州会津若松 寺嶋伝五郎様より習 鷺流」と記
し、終丁裏に「佐州相川ノ城下塩屋町住 三川周蔵写(朱印)」
と記す。寺嶋氏・三川氏などについては解題に記す。

20 「止動方角・福の神・千鳥」一冊

245×171。袋綴。共紙表紙。楮紙。打つて「鷺流狂言手附
止動方角 福の神 千鳥 他見無用」と記す。表紙見返に「嘉
永四年春じげつの初の日 佐渡乃相川塩屋町之住 参河
祇造者也 清高(花押)」と記す。裏表紙に「かみかす、あり
あわせ、此ほむ他見ゐたすにおひては、八百番神の御ぼつを
こうむるもの也、かならずたけん無ようなり、此持主 三川

祇蔵清高(花押)」と記す。

21 「能間」一冊

247×170。袋綴。共紙表紙。楮紙。打つて「他見無用 能間」
と記し、左下に「寺嶋伝五郎弟子 三川秋造」とし、灰色角
印を二個押す。裏表紙の真中に大きく「三川秋造者也」とし
て二個の角印を押し、そのまわりに散らして「かみかす、あ
りあわせ、佐渡あいかわ、塩屋まち」と記す。内容は〈鉢の
木〉から〈紅葉狩〉までのアイを記す。

22 寺嶋間の本 一冊

240×149。袋綴。共紙表紙。楮紙。題簽を表紙中央に貼り、全
曲名を書く。「上」とする。終丁表に「寺嶋伝五郎 此主也」
と記す。内容は〈梅枝〉から〈八嶋〉までのアイを記す。

23 狂言五番 一冊

197×252。仮綴。表紙なし。斐紙。曲名の小口に丁数を記す。

〔曲目〕連歌盗人・蚊相撲・仁王・末広狩・鈍太郎

24 狂言三番 一冊

23と同装。一具のもの。模様紙一葉つき。

〔曲目〕吃り・大黒連歌・花折新発意

25 「止動方角・宗論」一冊

247×172。仮綴。共紙表紙。楮紙。打つて「止動方角 習宗
論」と記す。

26 「木六駄」一冊

224×167。深藍色網目模様厚紙表紙。綴糸白。白色題簽、文字
なし。内題「木六駄」。

27 「蟹山伏」 一冊

245×170。仮綴、表紙なし。楮紙。「蟹山伏」。

28 「苞山伏」 一冊

250×175。袋綴。共紙表紙、楮紙。浅葱色題簽「苞山伏 全 他見無用 貞隆藏書」とある。裏表紙見返に「慶応四辰天九 月中廿有四日 蔵写之」として、朱印「白井貞隆」を押す。

29 大江山間 一冊

265×168。仮綴。表紙なし。楮紙。へ大江山のアイセリフ六丁。六丁裏に「サキ伝右衛門流 奈須ノ語」と朱書して、七丁から九丁まで本文を記す。

30 「巴」 一冊

243×172。仮綴。共紙表紙。楮紙。謄本。

31 「鷺流小舞」 一冊

247×170。袋綴。共紙表紙。楮紙。打ついで「他見無用 鷺流小舞全」とし、左下に「加藤氏」とあった「加藤」の上に「小杉」と書き込む。終丁裏に「安政二年正月 青野 加藤銀蔵持」とある「加藤」の上に「小杉」と書く。裏表紙見返に「安政三辰正月 小杉忠三郎守治(花押B)」と記す。

32 小舞謄 一冊

234×167。仮綴。共紙表紙、楮紙。題なし。

33 「習狂言小舞」 一冊

250×175。仮綴。共紙表紙、楮紙。打ついで「そとわ小町 藤戸 よろほし 習狂言小舞」と記す。裏表紙見返に「小杉忠三郎守治(花押A)」と記す。

34 「鷺流風流」 一冊

230×166。灰色厚紙表紙。綴糸黒。白色題簽に「鷺流風流」と記す。

35 森田流笛 一冊

174×295。仮綴。斐紙。「森田流」とする。

36 「舞方鼓手附」 一冊

250×172。仮綴。共紙表紙、楮紙。打ついで「舞方鼓手附」と記す。

37 笛唱歌 一冊

166×235。袋綴。表紙なし。斐紙。笛の唱歌。「序の舞」から「五十三般渉早舞」まで記す。最終丁に「文久二年八月 加藤姓写之 清久(花押A)」とし、「加藤」の上に「小杉」を書き、清久を消す。別に「小杉守治(花押B)」と記す。

38 断簡 二葉

末広の絵一葉。笛唱歌一葉。

39 「すりこぎしゃくしのもんたう」 一冊

246×170。仮綴。共紙表紙、楮紙。打ついで「すりこぎしゃくしのもんたう」と記す。墨付二丁。一丁「すりこぎ」、一丁「しゃくし」、「抑すりこぎと申へ、天神七代いさなきいさなみ」のように記す。

五 小型杉箱 七十二冊

1 茶色鷺流狂言本 三十四冊

239×165。茶色厚紙表紙、袋綴。綴糸白。楮紙。表紙左上に青双廓題簽。「米市・不聞座頭」を除き、すべて一番本。終冊

と思われる「奈留子」の裏表紙見返に「此組三十四」とある。書入・番号の類一切なし。外題によって曲目を記すが、内題と表記が異なる場合は内題を()の中に記す。

〔曲目〕(1)米市・不聞坐頭(聞ず座頭)。(2)井杭(いくゐ)。(3)船ふな。(4)とひ越(飛越)。(5)鶏聲。(6)塗師。(7)合柿。(8)文蔵。(9)富士松。(10)土筆。(11)盆山盗人。(12)文荷ひ(文荷)。(13)萩大名。(14)伯養。(15)茶麩座頭。(16)栗田口。(17)二千石。(18)連歌盗人。(19)寝音曲。(20)船渡聲。(21)石神。(22)水掛聲(水懸聲)。(23)輝。(24)三人支離(三人片輪)。(25)鴈盗人。(26)鏡男。(27)花争。(28)水汲新発意。(29)人歟杭歟(人か杭歟)。(30)空腕。(31)栗焼。(32)児滴流馬(児流鎗馬)。(33)いろは(伊呂波)。(34)なる子(鳴子)。

2 仮綴驚流狂言本 三十八冊

250×162。仮綴。共紙表紙、楮紙。「加藤銀蔵清久」を訂して「小杉守治」としたものが中心だが、識語を欠くもの、「三川周蔵」「岡田七之助」出自の本もあり、1ほどに均質な本ではない。打つてで表記されている表紙の記述、他の識語類などを一冊ごとに記す。○印は朱である。

- (1)「他見無用 ○土筆 二人事」。裏表紙見返「安政三丙辰年二月大吉日」と記し、「清久(花押A)」を墨滅し、「小杉守治(花押B)」とする。
- (2)「他見無用 呂蓮 三人事」とし、「加藤氏」を墨滅して、「小杉姓三人事」と書く。裏表紙見返に「小杉忠三郎守治(花押B)」。
- (3)「他見無用 鈍太郎 三人事」。右に「女」。「加藤氏」墨

滅。裏表紙見返に「小杉守治(花押B)」。

- (4)「他見無用 ○栗焼 二人事」。「加藤氏」墨滅。裏表紙見返に「安政三辰正月吉日」とし、「小杉清久(花押A)」を墨滅して、小杉守治(花押B)」と書く。

(5)「他見無用 △千鳥」。裏表紙見返に「慶応元年」とし、「加藤姓(花押A)」を墨滅、「小杉守治(花押B)」とする。

- (6)「他見無用 恵比須大黒 三人事」とし、「加藤氏」を墨滅して「小杉」と書く。裏表紙見返に「安政三辰正月 小杉守治(花押B)」と書く。

(7)「他見無用 苞山伏」。双廓「青野村」印。「加藤姓三人事」の「加藤」の上に「小杉」と書く。裏表紙見返に双廓「青野村」印、「小杉守治(花押A)」。

- (8)「他見無用 ○鴈磔」。「加藤氏」の上に「小杉」と書く。裏表紙見返に「安政三辰正月 小杉守治(花押B)」。
- (9)「他見無用 ○鶏流 二人事」。「加藤姓」を墨滅。裏表紙見返に「小杉守治(花押B)」。

(10)「他見無用 △大般若 三人事 加藤氏」。裏表紙見返に「安政三辰年正月 小杉守治(花押B)」。

- (11)「拾六番内○鼻取相撲」。裏表紙見返に「小杉清久(花押A)」を墨滅し、「小杉守治(花押B)」とする。

(12)「他見無用 宝の嚙取 加藤氏」。

- (13)「他見無用 菊水祖父 四人事 加藤氏」。

(14)「他見無用 △咲花 三人事 加藤氏」。裏表紙見返に「安政三辰十月」。

- (15) 「他見無用 引敷聲 四人事 加藤氏」。
- (16) 「祢宜山臥弥宜 鏡男女」。裏表紙見返に「安政四年巳九月加藤銀藏書之」と書く。
- (17) 「他見無用 鴈盗人」。裏表紙見返に「安政三辰六月廿一日小杉守治(花押B)」。
- (18) 「他見無用 拾六番 法師ケ母」。裏表紙に「小杉姓」。
- (19) 「他見無用 △末広狩 小杉守治」。双廓「青野村」印。
- (20) 「他見無用 △蟹山伏 三人事 小杉」。裏表紙見返に「小杉忠三郎」と双廓「青野村」印。
- (21) 「他見無用 △太刀奪」。裏表紙見返に「安政三辰六月十九日 小杉姓(花押A)」。
- (22) 「他見無用 △悪太郎 小杉姓」。裏表紙見返に「小杉守治(花押B)」。
- (23) 「鷺流 河原太郎全」。終丁裏に「明治廿八年旧五月 小杉守治」。
- (24) 「他見無用 骨皮 小杉守治」。裏表紙見返に「安政四巳九月」。双廓「青野村」印を押し、「小杉守治」と記す。
- (25) 「他見無用 ○神鳴 加藤氏」とし、「加藤」の上に「小杉」と書く。裏表紙見返に「安政三辰正月 小杉守治(花押B)」。
- (26) 「他見無用 柿山伏」。双廓「青野村」印。裏表紙見返に双廓「青野村」印と「小杉守治(花押B)」。
- (27) 「他見無用 麻生」。裏表紙見返に「小杉守治(花押B)」。
- (28) 「末広加利 鴈盗人 武悪 児流鎗馬 墨塗 他見無用 三川周造 好光者也」。表紙見返に「嘉永四亥年十一月廿六日

出来 三川周藏写」。終丁裏に「清高(花押)」と記す。裏表紙に「持主 三川周造 好光者也」と記す。

(29) 「他見堅無用 △口真似 二人事」。双廓「青野村」印。終丁裏に「嘉永五壬子神無月中旬書之 江戸岡田七之助(花押)」と記し、丸黒印「佐州 五十里 長新屋」と、双廓「青野村」印を押し。「岡田七之助」は観世座付狂言役者、仁右衛門派。『猿楽者分限短冊』に「岡田七右衛門」とある者で、土屋弼氏「佐渡鷺流狂言」(『佐渡郷土文化』五号・一九七七・三)に翻刻された、土屋辰次郎宛嘉永六丑年二月二十八日付免状に「鷺仁右エ門家脇 六世岡田七之助興邦」と見える。

(30) 「他見無用 △二千石」。

(31) 「他見無用 △人か杭敷」。

(32) 「サギリウ 隠笠」。

(33) 「他見無用 △茶壺 三人事」。裏表紙見返に「安政三辰年月」と記す。

(34) 「他見無用 △鉢木 雑乃間」。

(35) 「他見無用 △萩大名」。

(36) 「薩摩守」。表紙なし。

(37) 「相合烏帽子」。

(38) 「骨かわ傘かり詞・鍋八撥目代ノ詞」。表紙なし。

六 小型杉箱 十九冊、六葉、二点

1 文化小杉本「鷺流間 全」一冊

170×248。藍色牡丹花紋布覆表紙。綴糸白、二重綴。楮紙。左上に長方形小型白色題簽を貼布し、「鷺流間 全」と記す。

内題なし。目録として、「〇一ノ組 一高砂」から「〇十一ノ組 五十三籠祇王」(数字、〇印朱書)まで記す。目録終丁に紙片あり「惣計式百番」と記す。各組ごとに記す。

〔曲目〕一ノ組、高砂・老松・放生川・(觀世流)右近・淡路・代主・佐保山・弓八幡・志賀・呉服・松乃尾・逆鉾・伏見・御裳濯川・同大蔵太夫流・難波・吉野

二ノ組、放生川・和布刈・九世戸・岩船・玉乃井・養老・金札・氷室・竹生島・(金生流)右近・絵馬・寢寛・東方朔・西王母・橘

三ノ組、加茂・白髭・嵐山・大社・右近・松乃尾・鶯祭・御裳濯川・江乃島・白樂天・道明寺・浦島・富士山・難波・源太夫

四ノ組、田村・八嶋・忠度・兼平・通盛・敦盛・頼政・知章・箴・実盛・朝長・巴・碓被

五ノ組、東北・芭蕉・采女・井筒・江口・定家・夕顔・半菰・空蟬・野々宮・桧垣・伯母捨・仏乃原・藤・誓願寺・六浦・陀羅尼落葉・胡蝶・祇王・碓・恋重荷

六ノ組、小塩・浮舟・玉葛・梅枝・雲林院・遊行柳・草紙洗・吉野天人・龍田・三輪・求塚・綾鼓・三山・当麻・錦木・葛城・天鼓・藤戸・山姥・芦刈・盛久

七ノ組、阿漕・野守・松虫・女郎花・融・海人・須摩(慶源氏・鶯飼・鶴・項羽・殺生石・船橋・鐘馗・熊坂

八ノ組、絃上・大蛇・第六天・飛雲・是界・雷電・春日龍神・車僧・同替・大会・鞍馬天狗・葛城天狗・小鍛冶・大瓶狸

九ノ組、輪藏・雨月・豊干・龍虎・合甫・張良・忠信・橋弁慶・羅生門・土蜘蛛・現在禰・鉢木・夜討曾我・草薙・愛宕空也・舍利・谷行

十ノ組、檀風・常陸帶・調伏曾我・千引・錦戸・大江山・黒塚・船弁慶・烏帽子折・初雪

十一ノ組、鶴亀・皇帝・感陽宮・楊貴妃・松風・大仏供養・関原与市・雲雀山・三笑・鷺・住吉詣・鉄輪・唐船・蟬丸・正尊・七騎落・善知鳥・東岸居士・百万・護法・葵上・高野物狂・弱法師・加茂物狂・春榮・富士太鼓・小原御幸・斑(班)女・小袖曾我・元服曾我・小督・藍染川・室君・竹乃雪・西行桜・禅師曾我・吉野静・三井寺・藤永・卷絹・放下僧・籠太鼓・鳥追船・満仲・鶏龍田・安宅・国栖・邯鄲・花月・自然居士・俊寛・二人静・籠祇王

2 文化小杉本、鷺流間の本 一冊

135×197。藍色牡丹花紋布覆表紙。綴糸白、二重綴。楮紙。題簽なし。目録「一ノ組」の上に「会釈間」と記す。「〇一ノ組 高砂壺」から「〇十一ノ組 籠祇王五十三」(数字・〇印朱書)まで記す。組、曲目、並びまで1と同じ。本文も同文だが、注記は1の方が詳細な部分もある。曲目省略。

3 文化小杉本「鷺流替ノ間 全」一冊

130×162。藍色牡丹花紋布覆表紙。綴糸白、二重綴。楮紙。左上に長方形小型白色題簽を貼布し、「鷺流替ノ間 全」と記す。内題なし。目録として、「一大藤内」から「十八町積 輪藏替 間鉢扣」まで記す。注記・上演記録等が多い。

〔曲目〕大藤内・船弁慶・芭蕉・半部・朝長・望月・道成寺・石橋・白髭道者・江嶋道者・猿聲・神子神主・御田・鏡御裳濯・鱗・白樂天ノ替間鶯蛙・那須・町積・輪藏替間鉢扣

4 文化小杉本「諸流脇セリフ 全」一冊

165×240。藍色牡丹花紋布覆表紙。綴糸白、二重綴。楮紙。左上に長方形小型白色題簽を貼布し、「諸流脇セリフ 全」と記す。目録として「一高砂」から「七十九道成寺、八十同上掛ノ時、八十一同後」までを記す。ワキ方のセリフ。

〔曲目〕高砂・弓八幡・老松・竹生島・氷室(番号なく書入)・淡路・放生川・松乃尾・吳服・養老・志賀・大社・伏見・寢覚・金札・岩船・右近・室君・敦盛・八島・同那須・兼平・朝長・同中入・頼政・実盛・忠度・田村・通盛・知章・簾・巴・采女・野々宮・定家・芭蕉・江口・同中入・梅枝・東北・同中入・井筒・半部・仏原・松風・夕顔・藤・三山・同中入・祇王・小原御幸・綾鼓・求塚・草紙洗・吉野静・同後・碓・木賊・富士太鼓・遊行柳・浮舟・当麻・阿漕・西行桜・同連・誓願寺・同中入・住吉詣・二人静・東方朔・常陸帶・同中入・感陽宮・同大臣・碓潜・桧垣・伯母捨・六浦・楊貴妃・道成寺・同上掛ノ時・同後

5 「間二十九番」一冊

166×232。厚紙表紙。楮紙。打ついで「鷺流他見無用 間二十九番」と記す。目録のあとに「嘉永四亥年七月写之」と記す。裏表紙に「寺嶋伝五郎 陸重(花押)」と記す。

〔曲目〕草薙・同・三山・半部・藤・井筒・空蟬・野々宮・

仏の原・陀羅尼落葉・胡蝶・祇王・吉野天人・芭蕉・求塚・須磨源氏・忠信・豊干・同語・初雪・愛宕空也・大瓶狸・同乱序・二人しつか・龍虎・絃象・経政・玉葛・簾

6 間の本 一冊

142×236。仮綴。

7 「大習座禅」一冊

182×128。茶色縦縞厚紙表紙。外題なし。内題「大習座禅」。終丁裏に「鷺流大習両番之内 右は元善五郎事 岡村獅子尾より、小杉忠三郎殿ハママ書伝置者也 岡村獅子尾順則(花押)」と記す。四5「座禅」と共通の替の詞も記す。

8 「面箱千歳立形附」一冊

244×170。共紙表紙、楮紙。打ついで「大習 面箱千歳立形附 全」と記す。裏表紙見返に「文久元戌四月 加藤銀蔵写之」。

9 「望月」一冊

234×170。茶色厚紙表紙。左上に双廓題簽、「望月」とある。裏表紙見返に双廓「青野村」印。

10 「道成寺」一冊

227×166。藍色厚紙表紙。題簽に「道成寺」。終丁裏に双廓「青野村」印。

11 「小鼓手附」一冊

239×164。仮綴。共紙表紙、楮紙。「小鼓手附宮川氏」と打ついで記す。内容は「舟弁慶・東北」。

12 舎弟 一冊

246×170。仮綴。表紙なし。楮紙。狂言(舎弟)。

13 「鉢たゝき」 一冊

233×145。薄青厚紙表紙。楮紙。双廓題簽「鉢たゝき」。裏表紙見返に「青野村小杉忠三郎守治」とし、双廓「青野村」印。

14 「幸流鼓段取」 一冊

248×178。共紙表紙、楮紙。打つて「幸流鼓段取」。「青野村銀蔵」と書く。

15 風流装束付・面作者 一冊

249×177。仮綴。共紙表紙、楮紙。裏表紙に「明治廿六年九月書之 林喜正六十五才」と書く。内容は風流装束付と面作者。

16 小道具・衣類寸法 一冊

125×168。仮綴。共紙表紙、斐紙。「明治廿八年□九月 狂言上下モヨウ寸尺丈又色と頭〇中丈尺 小杉」と記す。

17 小舞謡 一冊

240×157。共紙表紙、楮紙。題なし。へ恵比須毘沙門からへ若菜までの小舞謡を記す。

18 「羽衣」 一冊

210×156。版本。奥附に「宝暦元年辛未十一月求版 大阪糸屋市兵衛版」。

19 「宝生小謡諸祝言」 一冊

227×166。版本。薄赤色厚紙表紙。内題「明治新刻宝生小謡諸祝言」。明治二十六年十二月、池善平。

20 本間氏書状。一点。

21 追善狂言番組 一葉

催主「岡村獅々尾」。「三月廿七日於両国河内屋半次郎席而晴

雨不論追善狂言尽相催し候間諸君子御来臨希而已」として、
〈末広かり〉以下十二番の狂言と出演者を印刷したもの。裏面に「本数百十七冊」と記す。『静岡英和女学院短大紀要』第十二号に拙稿の考察がある。

22 毛包 一点

表書「のし 御年玉 海附 葉泉寺」。裏に宛名「小杉忠三郎殿」。内容、白髪まじりの毛二束。

23 加藤銀造免状包 一通

「安政四丁巳年九月吉日 鷺仁右衛門正名」の「加藤銀造」宛「脇能間 脇狂言」相伝免状。これは前引土屋彌氏翻刻、土屋辰次郎宛相伝免状とまったく同時、同文。

24 小杉忠三郎免状包 四通

(1)「明治十八年三月 十九世鷺権之丞定與」発行の「小杉忠三郎」宛「御田、那須」相伝免状。

(2)「明治十八年旧六月廿七日 十九世鷺権之丞定與」の「小杉忠三郎」宛「初日二日千歳」相伝免状。

(3)同前「初日三番叟」免状。

(4)同前、ただし「小杉忠三郎」宛、「道成寺間」免状。

七 極小型杉箱 十七冊、五葉

1 「大習鷺流道成寺間」 一冊

123×88。楮紙表紙。「大習鷺流道成寺間」として、「鷺流仁右衛門弟子 佐州小杉忠三郎守治(花押A)印」。朱注あり。

2 「小習鷺流狂言拾六番」 一冊

155×120。薄茶色厚紙表紙。綴糸緑。左上に題簽、「小習鷺流

狂言拾六番」と記す。内題同前。目録には十四番の曲目を列記して、「〆拾四番」と記す。終丁裏に「鷺流佐州住主 小杉守治(花押A)」と記す。

3 「鷺流語」 一冊

113×162。茶色布覆表紙。題簽「鷺流語」、内題同。裏表紙見返に「小杉忠三郎守治(花押A)」と記す。

4 「鷺流面箱千歳立形手附」 一冊

3と同装。裏表紙見返に「小杉忠三郎守治」と記す。

5 「脇能間全」 一冊

176×127。薄藍布覆表紙。題簽「脇能間全」。終丁裏に「此本鷺流家許鷺仁右門 居城江戸柴新銭座 明治八歳乙亥二月吉、佐渡小杉忠三郎守治(花押A)」。

6 能小謡 一冊

249×175。楮紙仮綴、四丁。〈玉の井〉から〈えほし折〉まで九番の小謡。

7 「万心得」 一冊

178×118。茶色厚紙表紙。題簽「万心得」。「金春流道成寺」をはじめとして三十番の間狂言型付。目録、ついで〈月見座頭〉〈鷺〉を書き入れる。上演記録が次のようにある。

〈道成寺〉右者弘化三年五月廿一日上屋敷、稽古能之節、中西十郎右衛門相勤候節、間市来加太郎右之通ニ相勤候付相扣置候事

〈神子神主〉一、弘化三丙午年五月廿一日上屋敷、稽古能之節左の相手組ニ而相勤候扣、大社 小幡甚太夫・宗之丞・平之

進・正八郎・源八・友太郎 間神子神主 慎之助・清左衛門〈初雪〉嘉永元年十二月御出仕中奥御能之節当流ニ而初而勤也

8 「森田流笛頭付入用ヌキ書秘書」 一冊

90×118。渋紙表紙。外題なし。内題に標出した書名がある。

「明治九歳小杉忠三郎守治(花押A)」とある。

9 「森田流笛ノ唱歌 秘書全」 一冊

174×116。青色厚紙表紙。左上に題簽、「森田流笛ノ唱歌 秘書全」と記す。終丁表に「(ヨメズ)清久(花押A)」を墨滅して「小杉守治(花押A)、青性」と記す。

10 「他見無用森田流大秘書」 一冊

174×116。9同装。外題なし。内題に標出した書名がある。裏表紙見返に「小杉守治」と記す。

11 「春日流」 一冊

120×164。青色厚紙表紙。「春日流」と打つけに書く。裏表紙見返に「清久(花押A)」と記す。

12 間狂言セリフ 一葉

次の上演記録が付される。「嘉永四亥年十月於西丸大奥御能之節」として、「竹雪 御・ッれ石之助・八良五郎 御間女仁右衛門定好・供健(?)次郎」。

13 「森田流乱」 一葉

笛の唱歌。「明治九年子六月吉日 羽茂郡大崎村本間藤平、青野村 沢口銀蔵様」とある。

14 「獅子乱序」 一葉

笛唱歌。「羽茂郡大崎村本間藤平 青野村 小杉忠三郎様」。

15 「盤渉楽」 一葉

笛唱歌。「本間藤平 小杉忠三郎様」。

16 「金春流太鼓免状」 一葉

縦青罫線の中に曲目を並べたもの。免状の体をなさない。

17 「小鍛冶」 一冊

180×130。版本。灰色表紙。「正徳三年寺町通松原上ル町、今井七郎兵衛刊、觀世左近大夫章句」。

18 「隅田川」 一冊

122×140。活字本。「内第拾三卷」。裏表紙に「能楽倶楽部」と活字で記し、「本間」の朱印あり。

19 小謡本 一冊

185×135。版本。灰色表紙。「嘉永四^辛亥春再刊」。

20 「名寄全」 一冊

130×196。灰色厚紙表紙。左上に題簽、「名寄 全」。「十七世 鷺仁右衛門定好」とある。

21 「諸流習名寄」 一冊

133×197。青色厚紙表紙。左上に題簽、「諸流習名寄」。「文化九^壬申年十二月觀世大夫・同年十月金春大夫・同宝生大夫・同年金剛大夫」と続き、「文化九^壬申年十一月喜多十太夫」まで。

22 「代紳録」 一冊

122×171。赤茶色厚紙表紙。左上に「代紳録」と打つけに書く。右に「紀元二千五百三十六年 止水」と書く。表紙見返に、「新潟県佐渡国雑太郡」と記す。内容は辞書。

〔解題〕

一 所持者小杉忠三郎について

旧蔵者小杉忠三郎について、從來知られていたのは、椎野広吉氏『佐渡と能謡』（佐渡郡新穂町、仲野書店、昭25）による略歴である。まずこれを引いておく。

青野沢口加藤惣一郎弟出て、同村青野小杉家を襲ぐ。性直情径行明治二十二年町村制実施と共に青野・山田・窪田三ヶ村合併して野田村となるや村会議員となり、又第一代の村長となる。村治に尽した此の年の頃五十里村玉屋につき、^(ママ)狂言を修め後上京し、狂言驚流家元驚權之丞に就き奥技を極めて一家をなす。当時能狂言の衰退期とて家元零落し、亦佐渡に來た同流秘蔵の（狐怪の面・足利時代作）を初めてして、三光・出目甫閑・日光等傑作の面多く譲り受けて同家に蔵す。又笛をよくし、能楽の囃方となった。明治四十二年十月八日歿す。享年八十四。室ゆかは石田名畑拘樓の女本村婦人会創設に尽し後会長となり本会発展に力めた。

旧青野村は現在、佐和田町青野となり、忠三郎が建てた家はその三九三番地に旧家のたたずまいを残して現存している。小杉家の当主は小杉忠太郎氏で、忠三郎の曾孫にあたるが、現在は東京都港区に居住されており、小杉家所有の旧宅には高橋進

・みよ子御夫妻が入居されている。

佐和田町史編纂室の菊地初雄氏の御厚意によって、小杉忠三郎の除籍簿を検すると、忠三郎とその妻ユカについて、次のような記事を見る。まず忠三郎については、「前戸主 亡父小杉惣一郎」、「亡父惣三郎長男」「天保八年十月六日生」とあって、「天保十四年十月十二日相続、明治四十三年拾月八日午前六時死亡同月拾日届出同日受付（印）明治四拾貳年拾月四日家督相続届出同日受付（印）」、ユカは「天保十一年五月十五日生」で「安政四年二月廿四日当県当郡石田村 名畑喜左エ門二女入籍」とある。

一方、加藤惣一郎の除籍簿によれば、「亡父加藤惣左エ門」「左」は訂正のあとありで、「亡惣左エ門長男」「天保五年八月十日生」とあり、「明治五年以前相続年月日不詳、明治参拾貳年五月式拾六日隠居届出同日受付（印）」とあり、この謄本の限りでは弟の存在は確かめられない。

菊地氏の御示教の通り、これらの謄本から小杉・加藤両家の家系を作成すれば、次のようになり、両家の関連が見られない。

小杉家 小杉惣三郎―長男忠三郎―長男克巳―養子胤次―長男忠太郎

加藤家 加藤惣左エ門―長男惣一郎―長男小太郎―養子要次郎

ただし、また菊地氏によれば、「この頃の戸籍は正確を欠くものも時々はある」、「明治二年の『青野村宗門人別書上』の加藤惣一郎（これは「惣左エ門」とあるが、記されている年令から推定すると「惣一郎」に該当する）と除籍謄本を較べると、

「人別書上」に見られた妻と養子のこと、が除籍謄本では全く触れられていないと指摘される。確かに、忠三郎と惣一郎の記事を比較しても、忠三郎の方では天保十四年の相続まで明記されているのに、惣一郎の相続の方は「明治五年以前相続年月日不詳」とあって違いすぎる。

この事を考えるためには、忠太郎氏の談話が参考になる。要点をまとめて記す。

忠三郎は加藤家の二男、もともと加藤・小杉家は姻戚関係にあつたらしいが、当時、小杉家が絶えて空屋敷^{アキヤシキ}になつていたので、加藤家の分家の形で加藤姓のまま、そこに入つた。のち兄惣一郎と不和になり、加藤姓は名乗らぬと小杉姓を名乗ることにした。野田村村長となつたから、戸籍にも影響があつたか。加藤姓のときの名は不明。晩年七年間中風で臥つていた。享年は七十二・三歳、椎野氏のは誤り。小杉家は多い時で八〜十町歩の地主だった。佐渡ではなかなかの規模。

天保年間まで明示されている忠三郎戸籍には明治二十一年に野田村村長となつた忠三郎の意志が反映した作があると考えられよう。ここでは伝承の通り、通称沢口^{ソウグチ}、加藤惣左衛門の二男が小杉家に入り、のちに小杉忠三郎を名乗つたとしておく。没年・享年は椎野氏のを訂して、戸籍に就いて、明治四十二年十一月八日没、享年七十三(数え年)とする。

この伝書群の中で、一連の年紀と署名を持つ一群の書がある。安政二年(一八五五)正月の四31をはじめとして、元治二年(一

八六五)の四12に至るまでの期間、加藤銀蔵清久(花押A)名を小杉忠三郎守治(花押A・B)と訂正したものである。なかには、五4・五11のように「小杉清久(花押A)」を「小杉守治(花押B)」に訂正した例もある。五4は別に「加藤氏」を墨減してもある。これらの署名と、忠三郎が加藤氏の二男であつたという伝承を併せ考えると、この両者が同一人だった可能性が見えてくる。花押Aを共有すること、「加藤銀蔵」とあるものを訂正するとき、「加藤」のみを「小杉」と訂して「銀蔵」はそのままにしている場合があること、文化小杉本の「忠三郎守清」という署名は「守治」と「清久」の合成とも見られることなども、同一人説の根拠となりそうである。加藤銀蔵の出自・事績が確かめられないため、これは推量の段階にとどまるのだが、若井三郎氏『佐渡の能組・佐渡能楽資料第一集』(日本海文化研究所、昭60)によって幕末・明治初期の番組を検索してみても、小杉忠三郎は明治五年八月二十七日の新潟金毘羅宮奉納能を初見として何度か狂言・笛役でその名を見るのだが、加藤銀蔵名を見出すことができない。七13に本間藤平より「沢口銀蔵」宛の明治九年付笛伝書があるのだから、どこかに顔をだしてもよさそうなのに見えないのである。七14・15の本間藤平より的小杉忠三郎宛笛伝書(年紀を欠く)も一具のものと思られる。これは別人の証とも見られるが、また本間が、はじめ以前の通称で書き、ついで正しく宛名を書いたとも解しうる。六23の免状を受けた時、同一人とすれば数え年二十一歳、土屋辰次郎の数え三十六歳に比して若すぎる観もあるが、鷲仁右衛門正名はこの

頃、佐渡の狂言役者を直門に加えて免状を発行しているらしい。許されたものも重いものではなく、それほど無理ではないだろう。四31のように安政二年の加藤署名を訂正したあとで安政三年の年紀で小杉署名をするなどはやや理解しがたいが、加藤惣一郎と仲違いをしたあと、元治二年以降に、過去にさかのぼって集中的に訂正を加えたと見れば説明がつく。両者とも青野の住人であり、私は同一人説を採用するが、もし別人とするならば兄弟同様に近い仲ということになる。三27に見える「加藤惣右衛門」は、あるいは私の誤読で、忠三郎の父「惣左エ門」なのであろう。

高橋みよ子さんのお話では、沢口加藤家は、二・三年前、惣一郎の血縁関係は絶えたとのことである。また、忠三郎は金融業も営んでいて、伝書中には、入質して流れたものがあるとのこと、これは紺屋こうやのおじいさんが事情を知っていて、おばあさん(ウタさん)に話していたので、おばあさんもそれを認めていたという。幕末から明治初期にかけて地主階級が高利貸によってその資産を増していたのは一般的な事だったから、忠三郎もその例に漏れないのだが、その中にまとまった狂言伝書があったのは、やはり狂言役者の故であったのだろう。主力となる賢茂小杉本・文化小杉本と面の類も、十九世家元鷺権之丞所持のものが入質され、流れたものと考えておきたい。

二 鷺賢茂とその本

鷺賢茂は、朝日古典全書の底本として周知の鷺賢通本の著者

鷺健次郎賢通(定経)の長子、鷺慎之助賢茂(後に、鷺周三郎と名乗る)である。賢通と賢茂の生没年については、宮崎紋子氏「観世座付鷺流狂言の興亡」(観世、昭46・11)に石川弥一氏論に引く、林喜正の筆になる上演記録を載せ、「これは何の意味か不明」という文を引きながら生年を推定されている。この文書は実は文化小杉本四1を林喜正が写したものである。弘化三年(一八四六)に賢通四十八歳、賢茂十七歳である。これは数え年だから、賢通の生年は寛政十一年(一七九九)、賢茂の生年は天保元年(一八三〇)となる(これは『猿楽者分限短冊』によっても確かめられる)。没年は、宮崎氏によれば、賢通明治三年(一八七〇)、賢茂慶応四年(一八六八)。賢茂は明治の動乱期に死去し、賢通も間もなく後を追ったことになる。賢通の次男矢田半之助『猿楽者分限短冊』に、「養父亥之吉、実父松平修理太夫家来、鷺健次郎次男、子ニ貳拾壹歳」とある。後の鷺畔翁も鷺権之丞・周三郎とともに観世座付だったが、周三郎賢茂の所持本は権之丞に渡ったと考えるべきだろう。忠三郎がこれを入手したとき、これが賢茂の本である事を権之丞から聞いて、「鷺仁右衛門賢茂」の本だと箱書に記したのであろう。当然の事ながら、賢茂は「仁右衛門」を名乗った事はない。三22「春日龍神町積」を書いたとき賢茂は十四歳である。

六3文化小杉本「鷺流替ノ問全」には、「観世流望月」に付された、「二右ハ宝暦十三癸未年正月廿七日於 御本丸御奥観世織部泰観院被付仰定朝御勤被成候扣 尤脇ハ進藤久右衛門也」を最古の記事として、計十一回の上演記録を記している。宝暦十

三年（一七六三）の定朝は、十五世鷺仁右衛門定朝である。それ
に続けて別の本文を記し、「一右は文化二乙丑年九月十三日田安
御殿御能之節」として、観世鏡之丞のシテ、宝生万作のワキで、
間が「鷺仁右衛門定賢」までの配役を記し、「右之相手組ニ而相
勤申候」と記す。このほか定賢の名を明記するものや、定賢で
あることを推察させる鷺仁右衛門の記事があり、「朝長」に付
された「一天保九戊戌年十月廿四日於高輪御能之節初て相勤ル」
として、金春太夫のシテ、宝生才次郎のワキという配役の間に
「鷺健次郎」とする記事が最新のものとなる。これは、十六世
鷺仁右衛門定賢の記録を中心とし、その子賢通の記録を加えた
記事といえよう。

賢茂小杉本自体には、目録に示したように筆者・所持者の内
証となる記事はないので、小杉忠三郎の箱書を信ずるほかない
のだが、別に賢茂自署の本もある所からみても、この所伝は認
めてよいものと考ええる。

文化小杉本も、同様の径路で忠三郎が入手したものと考えら
れるが、三一文化小杉本「名寄・装束付」について考証したよ
うに、寛政九年（一七九七）以降筆録と推察される内証が存在す
る。この年には十五世鷺仁右衛門定朝は没し（明和三年（一七六
六）、前引宮崎論）、定賢の時代になっている。これと、前の
「鷺流替ノ間全」に見える注記を併せ見たとき、文化小杉本は
定賢の書き留を賢通が増補したものともみられる。安政二年（一
八五五）に賢通が賢通本奥書に記した「宗然殿君多年校訂之原
本」に最も近いのが、この文化小杉本であると言つてよいであ
ろう。

ろ。

文化小杉本・賢通本・賢茂小杉本、三本の関係については詳
述する暇がないが、基本的には同系の本文としてよいであろう。
賢通本は型付を含まず、ために『鷺流狂言型付遺形書』を援用
して朝日古典全書『狂言集』は翻刻されているが、小杉本の二
本を援用することによって、その演出が明らかにされることが
多い。ここでは一例として、文化小杉本から「萩大名」の、大名
が庭へ入る部分を引く。

亭主さくらくくくく右シテ太郎ノ詞ノ内、亭主戸ヲアクルテイヲスル

シテノ方ヘ行 太郎申御座りまするか シテ是に居るよ 太郎お出の由を申

て御座れば（中略）シテ夫ならバ通ふか 太郎よふ御座り

ませう シテ汝もつゞいてこい 太郎畏て御座る シテやい。

此柴垣の躰を見よ。（中略） 太郎よい取合で御座りまする

シテさあくこいくくト云々ソロク
舞台へ出ル

この部分、賢通本は、型付を欠くのみで、本文は全く同じで
ある。賢茂小杉本は、「さくらくくく」と注記が太郎冠者の「能
ふござりませう」の後へ入る。そのためか、はじめの太郎冠者
のことばが「申々亭主申されますハ」で始まるという小異が
あるが、注記の文言は文化小杉本と同文である。もっとも、こ
のような型付が全曲についてあるわけではなく、ある程度まと
まった型付が、本行に割注の形で、あるいは行間に書入れられ
ているのは、文化小杉本「鷺流狂言甲」で「萩大名・今参・二
人大名・止動方角・業平餅・寝音曲・鼻取相撲・舟渡聲・斯好
聲・鴈雁金・佐渡狐・蟹山伏・柿山伏・苞山伏・祢宜山伏・犬

山伏・腰折・梟山伏・花折新発意・腹不立・金津地藏・地藏舞・名取川」の23曲、「鷺流狂言乙」で「鴈盗人・八句連哥・盆山盗人・富士松・契木・児鎗流馬・醉辛・合柿・三人片輪・鬼瓦・舎弟・輝・縄なひ・鍋八撓・文山立・人か杭か・太刀奪・昆布壳・河原太郎・脱壳・鬼の槌・蛸・不聞座頭・伯養・井礪・花見座頭・茶麩座頭・寝代・若菜・箕被・鏡男・因幡堂・釣針・伊文字・内沙汰・鎌腹・心奪・悪太郎・塗師・惣八・仁王・福の神・恵比須大黒」の43曲、「鷺流狂言習」は全曲ということになり、賢茂小杉本も同様の傾向を見せる。

この三種の本の所収曲は、よく重なるが、賢通本は百九十二曲、賢茂小杉本は二百一曲、別に「別習鷺流狂言本」に十五曲、文化小杉本は甲・乙・習をあわせて百九十一曲で、少々の出入りがある。賢通本のみに見えるのが「庵の梅・月見座頭」の二曲、文化小杉本のみが「胸突」、賢茂小杉本のみが、「魚説法・御冷・禁野・鹿ぞ鳴・政頼・蟬・箏・引括・人馬・横座」の十曲となる。「別習鷺流狂言本」は稀曲集だから当然のことだが、「指鷺」が賢通本へ驚、へ姫糊」が賢茂小杉本と共通するだけで、他の十三曲は重ならない。賢通本だけでなく、小杉本も併せ用いる事によって近世後期の鷺流仁右衛門派の大略をとらえることができるという。

三 人名略考

説き残した主要な人名について触れておく。ただし、『狂言辞典事項編』に説かれていることは省略する。

六23 鷺仁右衛門正名。安政四年(一八五七)に免状を発行している。十七世仁右衛門正迪(七20では仁右衛門定好)は宮崎論によれば、嘉永七年(一八五四)に没しているもので、これは十八世仁右衛門定行にあたる。『猿楽者分限短冊』では、鷺猪右衛門、元治元年(一八六四)に四十七歳だから文政元年(一八一八)生れである。従来は生年未詳とされていた『狂言辞典』。

六24 十九世鷺権之丞定興。従来は「定興」の名乗りは紹介されていなかった。

四7・六7 岡村獅子尾順則元善五郎。六21に「獅子尾」とも書いているので、読みは「シシオ」であろうが、「獅子尾」は「シコオ」とも読める。明治末から大正初年にかけて狂言に取材した歌舞伎舞踊劇を作った岡村柿紅と鷺流としてのかかわりがあるか。ともあれ、吾妻能狂言がまだ演じられていた明治十年、その中心人物の一人が佐渡の役者に大習の曲を伝授していたのである。

六5 寺嶋伝五郎陸重。鴻山文庫蔵『狂言十五番』は、奥書に「嘉永四年亥八月江戸表ニ於而相改直置者也、寺嶋伝五郎」とあり、「所持者野口孝造」と記す。若井三郎氏『佐渡の能組』によれば、嘉永五年(一八五二)六月、柏崎惣社修復助成に五日間の能興行があり、その中で狂言を演じているのが、寺嶋伝五郎・野口孝蔵・尾上春造・三河周蔵である。寺嶋は佐渡で野口孝蔵・三河周蔵らに狂言を指導していた会津の狂言役者であった。若井三郎氏「明治の頃県内能楽の指導者Ⅲ」(新潟県「能楽連盟報」一九八五年五月)にひく『若松市史補遺』によれば、

「戊辰前後の能楽師」の「狂言師」の項に「寺島伝五郎」の名が見え、士族部ではなく町家部に挙げられている。四17の注記によれば驚伝右衛門派だったろう。

四17・19・20・21・五28三川周蔵清高(参河秋造)。四17に見える「三河新左衛門」と周蔵の関係は不明。四17・18の注記から見て、寺嶋伝五郎・三川周蔵の伝書は明治元年、一括して三川清左衛門の手で真藤治良泰久に売却されたものと認められる。相川住の三河氏といえば最後の佐渡奉行の用人として仁右衛門派狂言を演じた三河静観が想起されるが、静観と清左衛門は同一人であろうか。また、周蔵が伝右衛門派ならば、静観とはやや芸系を異にすることになるが、その関係はどうなっているのであろうか、資料不足である。大方の御示教をお願いしたい。

四17・18真藤治郎泰久。菊地初雄氏に御示教いただいた『沢根町史稿』『人物』の記事を引く。

真藤治郎 通称治郎右エ門という。沢根村田上の人。大蔵流狂言師として名がある。明治四二年一二月二四日卒す。

以下を略すが、生年は除籍簿によれば、文政十年(一八二七)三月十八日生れ、『佐渡の能組』に「真藤家文書」による番組が収められ、その活躍が跡づけられる。小杉忠三郎へは、この真藤治郎を経てもたらされたものであろう。この一連の文書には、忠三郎は所有名などを書き入れず、加藤銀蔵名伝書への氏名書き入れと好対照を見せている。

稿者の怠慢による遅延にもかかわらず、ここに紹介を許された中村保雄氏にお詫びとともにお礼申しあげる。また、佐和田

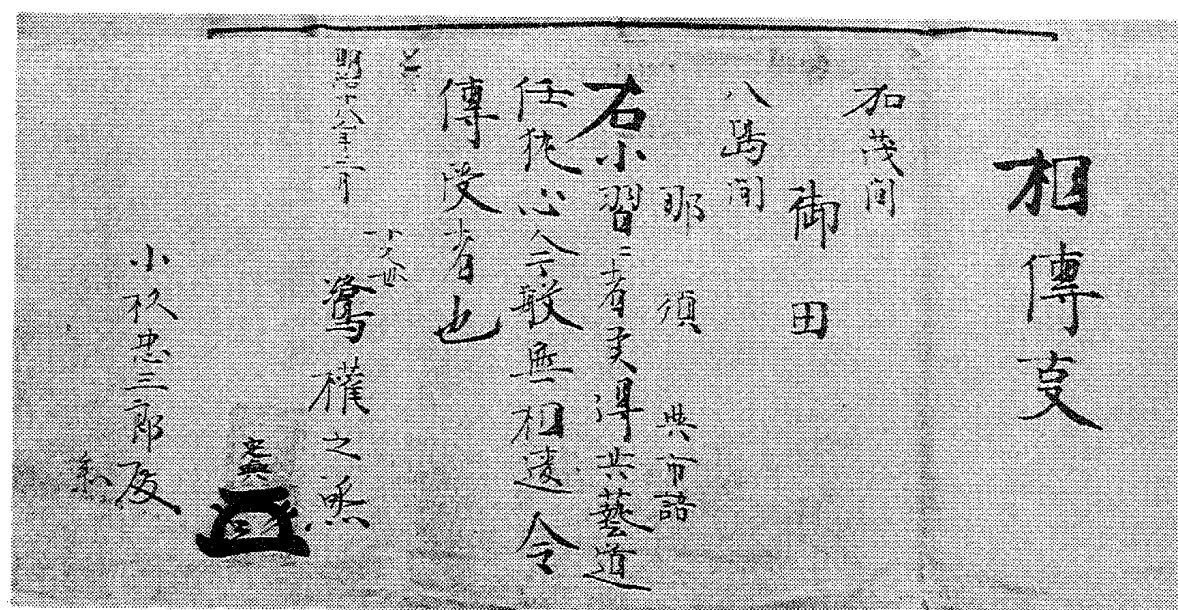
町史編纂室 菊地初雄氏には、佐渡人名の調査について多大の御示教をいただいた。特にお礼申しあげる。こころよくお話しいただいた小杉忠太郎氏、高橋みよ子氏にも併せお礼申しあげる。

一 賢茂小杉本第一冊表紙





二1 文化小杉本『鷺流狂言甲』表紙



六24 (1) 鷺權之丞定與相伝免状